

木村茂登子
小句集



木村茂登子の小句集

平成十七年秋



目次

あを 作品集

五

雛 祭 (特別作品)

二〇

最初の記憶

二二

あをかき集 その他

二五

ひとこと

四〇

あを作品集

霜月や一葉女史が新札に

平成十六年十二月号

白菜の高値小分けで売られをり

机辺の塵払ひてみもし文化の日

種なし柿小さな種を孕みをり

落葉掃く青いテントに住ふ人

火の色のかくもなつかし炉を開く

おだやかに明け立冬の日曜日

絵の中の半身の鮭も師走かな

平成十七年一月号

足弱のための手摺がつめたくて

白い花大好きことにシクラメン

起き抜けの眼に水仙の花一輪

聖なる夜胎児のごとく眠りたり

白足袋の男の素性はかりかね

旧街道お大師さんへ冬うらら

両の手に余る荷となり年の市

平成十七年二月号

雪もよひ追分といふ七ツ辻

牡丹雪この路次の奥行きどまり

打ち出しの音おごそかや除夜の鐘

炭で焼く餅打ち返し打ち返し

焼餅の焦げの加減の良き雑煮

初詣氏神木花開耶姫命

このはなさくやひめ

如月や鑑真和上の御前に

平成十七年三月号

襖絵の一羽の鳥の冬の旅

薄墨の「山雲」春寒料峭図

山焼や許されし火の美しく

日本列島小さく寒波の地図の中

つつましき女世帯や針供養

浅草寺淡島様へ針納

探梅や見所「瘦・老・蕾・稀」とか

平成十七年四月号

浅草寺淡島様へ針納

長い長いエスカレーター冴返る

ガレのランプ春の灯を点じをり

剥がされさうな訃報二月の揭示板

二月厭喪服のカラス大嫌ひ

佐保姫の先触れ荒武者春一番

四月馬鹿獲物の方が上手にて

平成十七年五月号

花だより日文矢文で北上す

時は春召されて天にパウロ二世

花冷や無為の一日それもよし

春の川橋真中が県境

平野啓子が語る「源氏」や春の宵

春の夜や上原まりの平家琵琶

清明やことに垣根の紅ベニカナメ要臍

平成十七年六月号

金銅の小さき釈迦牟尼仏生会

微笑みて釈迦牟尼甘茶受け給ふ

人波の一人となりて花疲れ

夜桜や大人の時間限りなし

土筆んぼここにあつたかもう杉菜

花大根ここももうすぐマンションに

みどりの日 今年は昭和八十年

平成十七年七月号

金太郎桃太郎もゐる菖蒲の湯

飾り太刀男はかつこ良く生きよ

薫風や後ふりむかず退院す

あぢさゐの何色に染む小さき毬

きてみれば花散りいそぐ五稜郭

夏めける津軽海峡旅終る

カルガモの子の数しかとかぞへかね

平成十七年八月号

梅雨寒の朝の厨のうす明り

時の記念日出足とられし長電話

枇杷ぶだう西瓜初物そろひぶみ

コンソメよりポタージュが好き桜桃忌

コンビニのそれもおむすび桜桃忌

桜桃忌雨にはあぢさゐが良く似合ふ

平成十七年九月号

目に見えて風わたりくる青田かな

風鈴やまどろむ前後鳴つてをり

抜殻のまだみづみづし蟬の声

氷菓売る「お客募集」の札下げて

迎火や胡瓜のお馬疾く戻れ

送火やお名残惜しめ茄子の牛

裕次郎はあぢさゐが好き雨男

一分の黙祷の間の蟬しぐれ

平成十七年十月号

三つ編のお下げでありし敗戦日

敗戦の日一つが朱にトマトの実

終戦記念日スイーツとなるさつま諸

炎天を何処に出でし留守電話

崩れてもくづれても白夏の雲

田の神を祀りて深き夏木立

賞味期限切れいくつも残し八月盡

平成十七年十一月号

みのりの秋もつたないが世界語に

天高し跣で踏める土を恋ふ

したたかに打ちし酒の香栗御強飯

もてなしは秋草の花一輪に

風の盆越中八尾坂の町

三味胡弓弾くは男衆風の盆

肩車まへにうしろに赤トンボ

平成十七年十二月号

四の日のお地藏さんへ秋日和

御手植のたしかなみのり御手に刈る

夕顔の五辨にはしるうすみどり

夕顔の棚のあたりの暮れなづむ

神棚のうすきほこりや柿紅葉

枯色をして螳螂の動かざる

パン焼ける匂木枯の交差点

平成十八年二月号

雪吊や蛇飛ぶがごと縄打たれ

父母の掌の中に手を七五三

携帯もパソコンもなし冬うらら

野良猫ののそのそと行く小春かな

小春日や蕎麦屋の庭のししおどし

曼珠沙華葉はひっそりと冬はじめ

オホーツクの幸を抱いて流水群

平成十八年二月号

流水の下豊饒の命の環

クリオネも餌を捕らねば生きられず

饅頭の塩味しみじみ義士祭

金星のほかなにもない冬の空

極楽が祖母の口癖冬至風呂

古暦まづは感謝の日日なりし

雛 祭

親王雛衣は松に下り藤

初節句紅白餡の引つ千切

マカデミアンナッツもブレンド雛あられ

一夫一婦三女五男のお雛様

お雛様に遠来の客春の雪

女子高の雛まつれる作法室

その中の一つは雛貝合

お雛様金欄緞子一張羅

幾山河家霊とともに古式雛

あるときは灯影にこはき雛の顔

お雛様三泊四日の桃の宿

檜扇も笏もあづかり雛納



最初の記憶



私は、昭和五年八月十六日、戸籍謄本によると、東京府住原郡蒲田町大字北蒲田で生まれている。現在の東京都大田区蒲田である。すぐ上の姉までは、現在の東京都文京区で生まれている。同じ東京の生まれでも、私は東京の端っ子だ、とよくからかわれた。

写真は、満一歳の誕生日の私である。戦災を免れた父方の伯母が持っていた。終戦前の、私のたった一枚の大事な写真である。勿論、この頃のことは記憶にない。

私の最初の記憶は、平成の天皇のご誕生を奉祝する提灯行列の光景である。満年令三才の頃である。

紙風船ほどの大きさの、揃いの提灯の揺れ動く光の交錯。バンザイの声、興奮した人々の途切れることのないざわめき。寒い夜だったと記憶している。

私は父に背負われ、途中で眠ってしまったが、その時の父の大きな背中とぬくもりを、今もはっきりと覚えている。最初の記憶が、国民こぞってのお祝いの場であったことを、私は幸せに思っている。

文京区から大田区へは、父の職場の移転によるものと聞いている。父は殆ど毎日夕刻には帰宅してをり、夕食の折、晩酌を楽しみながら、いろいろなことを子供達に話してくれるのが常であった。

子供達の命名について、「幹太く、美しい枝、良く茂る」という語が、木村の名字に縁があるので、そこからとった、と聞かされた。長女美枝子、長男良夫、次女幹子、そして三女の私茂登子である。

しかし、この語の出典については誰もたしかめてなく、今となって残念に思っ

いる。私の三年あとに生まれた妹の名は「貞子」この語の中の字ではない。

何か可愛相に思っていたが、昭和十三年に亡くなった母の戒名の中に、「貞」の一字のあることの気づき、血縁というものの不思議さと、安堵の思いをした。

因みに、妹の生まれた頃は、住所表示も東京市蒲田区蒲田町となっている。

木村家一男四女の卒業校、蒲田区立北蒲小学校は、今年平成十七年三月、児童数の減少により他校と合併することとなり、閉校した。

「富士の高嶺を西に見て」と、始まる校歌だったが、その風景はとくに失われていた。校庭に降る雪を見て「明治はとほくになりけり」と、感慨を述べた有名な句があるが、平成十七年四月二十九日私は

みどりの日今年は昭和八十年

の一句を自然に得た。

私が三才でご誕生の奉祝にまみえた今上陛下も、もう古稀を超えられ、終戦時は疎開児童であらせられた。

戦後六十年もの月日が経過しているというのに、日本はまだ近隣諸国との間に、戦争の後遺症というべき複雑な諸問題を抱えている。

私にとって、昭和は遠くならないのである。

あをかき集

その他

七人の小人の帽子唐辛子

平成十七年十一月

糠床の味のお目付唐辛子

身を粉にしても脇役唐辛子

唐辛子もつて名代の老舗かな

小袋の一味と七味唐辛子

月の衣雲にうすものと太物と

平成十七年十二月

絹の道砂漠の月の孤独かな

同じ月アラビアンナイトの国は今

向田邦子の恐いおはなし昼の月

月と芒余白の闇にゐる私

大師みち旧東海道初時雨

平成十八年一月

万年屋奈良茶飯跡初しぐれ

川崎市川崎区大師町初しぐれ

久寿餅もトントコ飴も初しぐれ

神仏混合名残の鳥居初しぐれ

霜柱踏んだゴム長ちゃんちゃんこ

平成十八年二月

ガラス戸がカンバスとなり霜の花

霜柱地層とも見ゆ山だより

しばらくは手を擦つてゐる炬燵かな

爪先で促してゐる炬燵かな

御降りや去年のことは忘れませう

平成十八年三月

根深汁京と越後のあはせ味噌

両の手で受ける煮えばな根深汁

筒切の芯ご用心根深汁

浜鍋や仕上げに葱をざつくりと

講師より年長多き夜学かな

以後
その他

石路の花猫良く居つく寺の庭

一年の汚れもつとも台所

しのこしたことの数々年暮るる

初富士や弧峰巍然と青空に

初 咲 の 椿 そ の 名 を 春 曙 光

春 霞 も や ひ て み せ ぬ 水 平 線

白 魚 の 黄 味 に つ つ ま れ す ま し 汁

古 都 奈 良 は こ れ よ り 春 の お 水 取

利 休 忌 や 菜 の 花 の 黄 が 見 て を り ぬ

校門に桜の大樹 入学す

咲いた咲いたさくらが咲いた 一年生

春の夜や町会連の出前 寄席

前座として 主役の高座 春灯

撥太鼓に送り出されて 朧月

春の午後紅茶と泉屋のクッキーと

春昼の孤独を刻む置時計

恋ふるごと海の色目に初がつを

緑陰や清正の井戸訪ね来て

旅愁はや窓いつぱいの青嵐

長い坂のぼりきつたり汗拭ふ

綿100%したたかに汗すつてをり

海の日やぐるりを海の本地図

敗戦の記憶の一つ蟬しぐれ

立秋や蒼きを分けし水平線

曼珠沙華此岸に咲いて秋彼岸

秋彼岸浄土真西に浄瑠璃寺

秋刀魚旬海の色して八頭身

鎧下そのまゝ栗の渋皮煮

トンネルを出るたびまぶし秋の海

白菜を裂くや芯まで葉のはじけ

蓑と笠しぐるる中に蕪村の絵

聖夜聴くさをり祥子の讃美歌集

オルガンのひびきなつかしクリスマス

終

ひとこと——木村茂登子

ご縁があつて、俳句会員誌「あを」に参加させていただき、一年余が過ぎました。この間、ところを得た思いで、私なりに真剣に俳句と向き合つた、と、実感しております。

七十五歳の記念として、短期間の僅かな作品ながら、今の自分の身の丈の作品としてまとめておきたいとも、又、これまでの生涯でご交誼を重ねていただいた方々へ、近況報告にもしたいとの思いで、佐藤喜孝代表にお願いし、お許しを得て、「あを」に準じた書式で、小作品にさせていただきました。

佐藤喜孝代表・吉弘恭子さんに感謝いたしております。

平成十八年 春



木村茂登子の小句集

著 者 木村茂登子

発行日 平成一八年六月三〇日

発行人 佐藤 喜孝

カット 松村美智子

発行所 竹僊房

〒一六四―〇〇一一

東京都中野区中央二丁目五十番地三号

電話 〇三・三三七一・四六二三